



たたみラグ登場!

住宅の個室は洋室が当たり前となり和室のみで発展してきた畳は活躍の場が減少しています。

そこで、これからは逆に洋室に畳が進出してどうか?という発想で「たたみラグ」の登場です。東レから発売されている介護用畳シリーズ商品です。従来の正方形をした置き畳とは少し形が異なっており、丸い形をした洋室にも馴染みやすい商品です。

しかも介護用の畳表で作られているので防水・耐久性が強く汚れの心配も少ないです。

機能面では絨毯を超えた「たたみラグ」。この存在を是非多くの方に知っていただき、また畳のある生活を送っていただけるようにな

ただけるようになるれば、和室自体も見直してもらえらきつかけになるかもしれません。



写真東レ「彩美」

Tatami Mode



中小の住宅メーカーが最近よく取り入れる畳があります。それは畳(半畳)の色を変えてモノトーン柄に敷きこむ畳です。

住宅を舞台に新和風のスタイルが少しずつ出来上がってきているように感じます。

What is the city?

都市思慮

「渋谷という街(4)：東京のタワービル」

1991年、バブル後の「失われた十年」が来た。以後今日までまとめて「失われた二十年」とも言うらしい。ところがこの平成不況の東京でビル建設だけは旺盛に続いてきた。しかもオフィスにしるマンションにしる目立つビルは全部タワーである。今時100m程度の高さでは誰も驚かなくなつた。今月はこのタワー化の経緯をまずおさらいする。

わが国の「超高層の曙」は1968年の霞ヶ関ビルである。新橋駅から外堀通の突き当たりがこの巨大ビルを眼にしたときのシヨックは今でも忘れたくない。1971年に京王プラザホテルが建てられ、西新宿がタワービルのラッシュとなった。

丸の内の三菱は丸ビル建て替えまで待たねばならなかったが、西新宿では住友、三井、野村、生保など大手財閥系資本が一通りビルをつくらせて来た。その後の十年間にタワーホテルの隆盛が来る。品川駅東口にブルーのインターシティができ、少し遅れて新橋の汐留シオサイトが始まった。どちらも旧国鉄の跡地再開発である。品川では続けて旧操車場跡地にグランドコモンズが開発された。インターシティとの間の長さ400mのセントラルガーデンが汐留には無い緑の都市景観を形作っている。丸の内も大様変わりをしているが、あそのこの日本のビルデベロップパーはどうして始めのような街景観の統一を考えてくれないのだろう。一流商業テナントの仲通りを歩いていても、実は汐留が極めて判りづらいようにタイクツなのです。

こういった大規模ビルのことを「シティ・インザシティ」と呼ぶ。半世紀前、私の学生時代のアメリカで生まれた都市用語である。要は、新しいタワービルがあたかもそれ自体が小さな街であつて、立地している古い街並みとは無関係だということ。実際、六本木と六本木ヒルズやミッドタウンには相互の都市的な補完関係がありません。

幸か不幸か渋谷はこういった動きとは正反対の街であつた。それが渋谷ならではの街個性をつくつたのだが、それは次号に書きます。

しまづ・よしき / 都市アナリスト。
京都大学に学び西山外三に師事。東急総合研究所取締役地域開発研究部長・顧問を経て、立教大学大学院教授。
08年より
S&Associatesを主宰。